勝福寺寺報

ひびき

第 86 号

2017年 6 月1日

お念仏と共に　～　如来に念じられて生きていこう　～

我が家には、二匹の犬と二匹の猫がいる。捨てられたのであろうか、そろっと身をすり寄せてきて、我が家に住みついた。はじめは遠慮がちであったが、今では、ここで生まれ育ったのだというような顔をしている。

その四匹には、申し訳ないことだが、避妊と去勢をしてもらった。そのせいでもあろう、彼らの関心は食べることにあるようだ。犬はその気配を感じると、エサが出るまで30分近くも吠え続けるし、猫はエサの準備をする掌を下から突き上げたり、足にからみついてくる。

準備ができてエサを置くと、「いただきます」とも言わず、ガツガツと食べる。見ていて気持ちがいいぐらい真剣に食べる。そして食べ終えたら、もう、私たちの方を振り向きもしない。勝手きわまりない態度に、つい「ごちそうさま」ぐらい言ったらどうかと怒ってみても、どうしょうもない、馬耳東風である。

ところで、人間の場合は、どうだろう。掌を合わせてからおっぱいを飲む赤ちゃんがいるであろうか。考えてみれば、「いただきます」も「ごちそうさま」も、教えられてはじめてできるようになったことである。もし、教えられなければ、犬や猫と同じように、ただ食べ散らかしてしまうことになるであろう。お金が万能と錯覚されるような世になって、いよいよ、そんな人が増えてきたように思うのだが、いかがであろうか。

実は、「食べ散らかす」ということは、食べ物だけに限ったことではないのだ。それは、人生を生きる心の姿勢の表れであって、そのような人は必ず、人間関係も、自分の都合で「食べ散らかし」、与えられた自分のいのちや人生の時間を、気分で「食べ散らかし」てしまうに違いない。若い人の虚しさも、老人の淋しさも、そうした罪深い生き方から必然した罰でなかろうか。

眼前の食事、ご縁の人々、今日の一日 …、与えられたその一つ一つに込められている深い願いに想いを寄せ、それを学び、その心を育むことが、「仏法を聞く」ということである。

仏法を聞いて、人生を成就していこう。

（釋 知道）

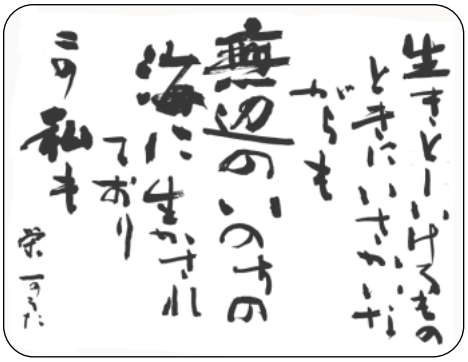
発行：真宗大谷派響流山勝福寺　〒879-0471宇佐市四日市1426 TEL 0978-32-1806　メール：kouru@cd6.so-net.ne.jp

勝福寺春季彼岸会法話一（3／24）

「歳を取っていくということ」

酒井浄圓師（行橋市浄喜寺副住職）

本日のテーマでもありますが、老いつつあるということを、どのように自分で受け止めていったらいいんだろうか」ということを、目の前の問題として、どうしても問うていかなければならないということがあります。同朋大学の前学長の浅野玄誠さんという方が、哲学者で大谷大学教授の鷲田清一（わしだ）さんの言われた「老いは問題ではなく、課題である」という言葉を引用して、月刊『同朋』に寄稿しています。「老い」を「問題」という場合、老いはない方がよいものと見ています。アンチ・エイジングという言葉もあります。しかし、そういうふうに老化に抵抗することで、一体、何が解決したのでしょうか。解決どころか、むしろ、仏教を実践していく場が失われるのじゃないかと感じています。



人間にとって老いがもつ一番大きな意味は、死について真面目に考えるようになることではないでしょうか。若い時には、いくら死について考えるといっても、なかなか自分自身のこととして受け止めることはできませんが、年齢を重ねて、検査などで病気が見つかってくると、ようやく自分にも死が身近なこととして迫ってきます。「苦」ということを自分のとりくむべき課題として受け止めるのには、老いについて考えるのが一番なのです。老いについて考えるということは、具体的には「老いいく自分がどうなったらいいのか」ということだと思います。

我々の人生というものは、生まれる時も受け身だし、死んでいく時も受け身なんです。さらに、生から死の間も、縁が決めてくるから、やっぱり受け身です。常に受け身の生き方に終始する。これが一番、耐え難いことかもしれませんね。自分の生きがいというものを感じられる、そういう人生でありたいと願うわけです。

廣瀬杲（ひろせたかし）という先生が『根源的能動―本願―』という本に書いています。基本的に、受け身の人間を変えていく力、それは常に人間を生みだすような力です。おはたらきですね。それが従来の言い方でいうと「往生」です。「往生」とは、往（い）って生まれる、とも言われますが、そうじゃなくて、前に向かって進んで行く生活なんです。これが「往生」ということの意味と言っていい。私たちが往生する歩みであるのかどうかということが、そのまま、私たちの救いなんだ、ということではないでしょうか。

人間の根性は、転んでもただでは起きない。宗教をも利用しようと考えるのが人間です。しかし、利用したとたんに、それは宗教であることを失うのです。法然上人が、「選択本願念仏」とおっしゃったとき、初めて、念仏が人間の利用する利用性というものを超えたわけです。念仏こそ本当の拠り所（人間の宗である）ということが明確になったとき、その念仏こそ、人間をして、本来的な受動性を転換して根源的な能動性を成就する、唯一無二の道になったわけです。

【聞き書き担当感想】

老いを表面的に考えれば「まらんこと」となります。しかし、一歩転じて、人間としての実り、成熟のときと考えれば、何か嬉しくなります。その転じさせるものに出会う歩みが、往生の歩みなのだ、と聞かせていただきました。

南無阿弥陀仏

（釈 和敬）

春季彼岸会法話二（3／25）

「生きているあいだは、生きていこう」

村上由香思（耶馬渓町・嚴浄寺住職）

お念仏する人は、言い訳はいらない。ありのままを生きていけ」と、親鸞聖人から教えられています。

私の次男は父に似て囲碁が大好きですが、勉強の方は全くしません。その子は生き物も大好きで、小学校の時、中津のドブでナマズを捕ってきて大喜びしました。ところが水槽を洗っている隙に、入れ物から飛び出して死んでしまったんです。次男はのたうち回って泣きました。そして柿の根に埋めて、小さな木を墓標のように立てたことがありました。いのちは、いつも、死と隣り合わせですね。

京都の法然院に知人を訪ねていったら、3／11を追悼する悲願会（ひがんえ）」というイベントが開かれていました。そこで、和三郎というシャンソン歌手が茨木のり子さんの詩を歌っていて、忘れられません。

生きているもの
死んでいるもの
ふたつは寄り添い
一緒に並ぶ
いつでもどこでも
姿をくらまし
姿をくらまし

生きる」ということには、ただ生きる」ということでなく、生きているという実感をもって生きる」ということがあります。あなたは本当に生きていますか」と問われたら、どう答えられますか。

私の住んでいる耶馬渓町は過疎化率は45パーセントを超えています。小学校は次々と閉校し、どちらを見てもたそがれの方向、つまり西」に向かっています。お参りにいけば、ようがない」の嘆きの声ばかりです。

しかし、その嘆きが、その愚痴が、そのまま徳になっていくような歩みが宗教心ではないでしょうか。

親鸞聖人のご和讃に、

罪障（ざいしょう）功徳の体（たい）となる
こおりとみずのごとくにて
こおりおおきにみずおおし
さわりおおきに徳おおし

と、ありますね。

二河の喩（たと）えにも、「（敬いて）一切往生人等に白（もう）さく」とあります。西」に向かうといっても、単に死」に向かっているのではなく、往生安楽国」―安らかな世界を願って生きていく、という方向性をもっていく。

「永平社宣言」を起草した西光万吉（さいこうまんきち）に業報に喘（あえ）ぎつつ白道（びゃくどう）を進む人間の姿を見よ」という言葉があります。おのおの、みんな違う業報に、―誰にも変わってもらえない業報に喘ぎながら一歩一歩、白道を歩んでいくのです。苦しそうだけど、苦しみがすべて徳になっていく道があるのではないでしょうか。

心配せんでも、生きている間は死にませんので、生きているあいだは、生きていこう」と言い切れるような私になりたいなぁと思っています。

【聞き書き担当感想】

私は村上先生と同じ耶馬渓出身で、同郷の友達のことを思いながらお話を聞いていました。宗教は求めたり、期待するものでない」と言われましたが、私なんか弱い人間ですので、困ったときの仏頼みとなります。宗教とは、自分の我を見つめ直し、他人と比較しなくてもよい生き方ができる、と言っているのではないかと思います。

仏法のことは何も分からない私ですが、お念仏と聴聞は続けなければいけないと思いました。（松本　知代）

勿忘（わすれな）の鐘

今年も忘れることのできない3月11日がやってきました。今年は午前中にお寺で蕎麦打ちを体験して、その蕎麦をみんなでいただきました。午後は本堂で勤行の後、震災の悲しい記憶から立ち直ろうとする人たちを描いたビデオ「救いたい」を観て、14時46分、参加者全員が、震災で亡くなられた多くの命に想いを寄せながら、鐘をつきました。

南無阿弥陀仏

憲法は日本の宝もの

藤谷純子

五月三日は七十年目の憲法記念日ということで、いろいろな報道がなされました。私はＮＨＫの「平和国家はこうして生まれた」を見て、現憲法がアメリカによる押しつけ憲法だとの見方が間違っていると解りました。それに、たとえ押しつけだったとしても、あの悲惨な敗戦を味わった日本人にとって、この平和憲法を獲得したことだけが後代への最大遺産だったと思います。それによって七十一年間にわたって、日本国の名で一人の人も殺さなかった。これは素晴らしいことです。科学や経済、文化やスポーツの発展も平和なればこそです。国家間の利権や民族や宗教などで紛争やテロがあちこちで起きている中、戦争放棄を謳った平和憲法あればこそです。その恩恵を忘れてはならないと思います。

この番組の始めに昭和天皇が六年生の時に書いた「平和国家建設」というお習字が映されてびっくりしました。戦後も「恒久平和は」銃剣ではできない。非武装による和解しかない」と言われたそうです。そして神国思想を背景として天皇制が軍国主義教育を推進し、侵略戦争を正当化していった誤ちを繰り返さないための憲法による日本国の再建を、天皇自らが率先して国民と共に願ったのでした。

今の憲法がいのちとしているのは

＊国民主権
（国のための民でない）
＊基本的人権の尊重
＊平和主義

七十年間守ってきた憲法を今、現実にそぐわないとして多数決だけで変えていこうとしています。日本の最初の憲法である聖徳太子の「十七条憲法」第一条に「和（やわ）らかなるをもって貴しとす」、これが日本国の初心だと思います。初心を忘れると大和魂とか戦艦大和とかと好戦的になってきます。戦争は勝っても負けても大きな傷を永く残しています。

和とは不和の悲しみなり
感応道交なり　（金子大栄）
南無阿弥陀仏

《生活の知恵袋》

「認知症の人に対する接し方」

渡辺末子（四日市常徳）

最近の日曜日の朝のことです。お宮の掃除を終えて家に入ろうとした私は、家の前をウロウロしながら歩いていた高齢の女性が気になり声をかけました。

名前と住所をお聞きし、会話する中で認知症の方だとわかり、市に電話して住所地の民生委員さんと連絡をとって対応してほしいと依頼しました。日曜日でもあり市で対応できなかったのか警察の方が二人やってきて、いろいろ質問していましたが、矢継ぎ早で最初はあまりいい対応ではないなと感じました。

私は、義母が認知症でたびたび徘徊を繰り返していたこともあって、当時、四日市南小の校長をされていた渡辺重昭先生のご協力を得て、七年前から子供たちに「認知症の知識と理解」というテーマでお話をさせていただいています。今では対応の仕方を子供たちに話した後、実際に体験してもらっていますが、素直な子供たちには感心させられます。

大切なポイントは三つあります。

①自己紹介をして名前を聞くこと、
②ゆっくり話すこと、
③目線を合わすこと、です。

「認知症」が「呆（ぼ）け」と言われていた時代、「呆けたら何もわからなくていい」と言われていましたが、話す言葉を失っているだけで、心は生きているんです。

たんぽぽ子ども会で楽しかったこと

四日市北小三年　播　ひかり

春休みの子ども会は、おしゃかさまにお花をかざった後、サイクリングに行きました。

やばけいについて、お友だちと、じてんしゃをこぎながら、いっしょにお話をしました。テレビのしゅざいがあって、「風が気もちよくて、楽しかったです」といいました。

その後、川らでバーベキューをしました。外で食べたので、とくべつに、おいしかったです。

いつも、おせわをしてくれる、おじちゃんや、おばちゃん、ありがとうございます。こんどの子ども会も楽しみです。

ご門徒さん こんにちは！ 第九回

思いやりの心

若林範子（柳ヶ浦）

今回は、勝福寺仏教婦人会の副会長を六月までなされていた若林範子さんをお訪ねしました。

いつも穏やかな笑顔の若林さんは今年六十九歳、中津市で会社員の両親から三人兄弟の二番目で長女として生まれました。小さい時から穏やかな性格で、周りの人からとても可愛がられたそうです。そして本が大好きで、小学四年生の時には宮沢賢治の詩「雨ニモマケズ」を暗誦したそうです。

学校を卒業すると花嫁修業をします。でも都会に憧れ、大阪の親戚を頼って就職しますが、都会の生活に馴染めず、すぐに帰って来ました。

そんな若林さんにお手次寺のご住職から「東別院で事務員さんを捜しているが、行ってみないか」と声をかけられたのが縁で、別院の教務所に就職します。そして別院に五年間勤めますが、結婚を機に退職しました。

結婚の相手は、兄の高校時代からの友人で、自然に結婚しようかということになったそうです。

ご主人は、労働基準監督署に勤めていたので転勤が多く、佐賀、日田、中津と転勤します。そして中津に帰ってきたのを機に、ご主人の柳ヶ浦の実家の側に住みますが、ご主人はずっと単身赴任生活を続けます。そして退職後も大分市で社会保険労務士事務所を開き、仕事半分、趣味半分の単身生活を謳歌しているそうです。

若林さんは二人の子供に恵まれ、ご主人の実家の家具店を手伝っていましたが、四十四歳の時に大事件が起こります。

中津の実家の近くで軽トラックを運転中、大型ダンプとの正面衝突事故に遭います。車は大型ダンプの前部にめり込み、レスキュー隊がカッターで車を切断して救出しました。現場で事故の状況を見た中津の両親は娘の死を覚悟したそうです。幸い死は免れますが、両手・肘がバラバラの粉砕骨折で感染症の恐れのため、大変危険な状況だったそうです。

二週間後、その危機から脱したので大分の病院に移ります。そこで九時間に及ぶ大手術を行い、手術は成功します。しかし手足に痺れが残り、今でも歩くのに支障をきたしています。

そんな大事故を経験しても若林さんは「手に神経は無いけど、慣れて今では針も持てる」とにこやかに話されます。その若林さんの趣味であるパッチワークの作品を見せてもらいました。緻密で丁寧な作品は、とても手が不自由だなんて想像も出来ない程素晴らしい作品です。

九ヶ月に及ぶ入院中、先生から「普通の生活が出来るようになるのに二年かかる」と言われたそうですが、退院の時は杖で歩けるまでに回復し、その杖も三ヶ月で不要になったそうです。

その奇跡的な回復には、若林さんの「くよくよしない性格」が関係ありそうです。中津の病院に入院中、毎日付き添ってくれた母が後で若林さんに「お前が全然泣いたり悔やんだりしなかったので助かった」と言ったそうです。何でそんなに穏やかになれたのか尋ねると「私が泣き叫んだり、苦しんだりすると周りの人がやりきれないだろうな。という気持ちが根底にあったと思います」と答えてくれました。

どんな苦しい時でも、常に相手を思うことが出来る若林さんの凄さに感動しました。だからその思いやりの心が穏やかな笑顔に表れているんですね。

さて、若林さんに三年間の婦人部副会長の感想を尋ねると、「先ず、足の不自由な私をみんなが連れて行ってくれたり、送ってもらったりして大変お世話になったこと。次にお寺の内部のことがよく分かりだしたこと。以前は役もしてないので口を出したり、手を出したりするのは悪いかなと遠慮があった。でも役を経験すると、お寺のことが分かり、行きやすくなりました。みなさんは敬遠するけど、是非一度経験した方が絶対良い。いろんな人に会えるし、お話しも聞ける。とても良い経験だから是非してみたらいい」と話してくれました。

今、若林さんは恵信尼様を題材にしたパッチワークを構想中です。そして勝福寺の親鸞聖人七五〇回御遠忌法要の時に、みなさんに作品を見てもらおうと考えています。

どんな素晴らしい作品が出来上がるか、とても楽しみです。（文責　渡辺　重昭）

いきいきとした目の輝き
「ミンダナオ子ども図書館」の若者達

フィリピンのミンダナオ島で、戦争や家庭崩壊のため身寄りが無くなった子ども達を引き取り、生活の支援を行う「ミンダナオ子ども図書館」を主催している松居友さんと、施設で共同生活をしている青年たち十四名が支援者から招待されて来日しました。彼らは日本の子どもや青少年たちと交流するため一ケ月ほど各地をまわっています。

松井友さんと若者

ここ勝福寺にも4月30日に寄ってくれました。本堂で彼らが披露してくれた収穫の喜びを表す民族ダンスやスピーチには、想像を絶する苦労を重ねてきたにもかかわらず、明るく、生きる力が満ち溢れていました。その姿は本堂に集まったたくさんの観客に感動を与えてくれました。彼らのうち四名の感想です。

○ノルハイヤ(女性 19歳)

日本に来ることができてとっても嬉しいです。日本に来ることは、私の夢の一つでした。みなさんに会えて本当に嬉しいです。

○ジョバリン(女性 17歳)

毎日が充実しています。そして、すべてのことに感謝でいっぱいです。日本の人々に会って新しい友だちをつくるのが私の夢の一つでした。私を支援して下さっている方にも会えて本当に嬉しいです。

○ウォルター(男性 18歳)

兄弟、姉妹のようにうちとけ合い、ひとつになれて、とても幸せな時間でした。ぼくはこの思い出を大切にします。みなさんもそうだといいな。幸せにしてくれてありがとう。

○クラウディン（女性18歳）

民族ダンスのメンバーに選ばれ、日本に来れて感謝でいっぱいです。みなさんのあたたかいおもてなし、本当にうれしかったです。

＊日本の子どもたちには滅多に見られない「いきいきとした目の輝き」にドキドキしました。物やお金が溢れていても心は貧困に見える日本はこれでいいのか、考えさせられました。

〈編集後記〉

ミンダナオ子ども図書館を主催する松井友氏とはどんな人かと思い、調べてみると父、妹、元妻は児童文学者。友氏も絵本の編集者。しかし離婚を経験し、その苦しみから立ち直るために、フィリピンの貧しい子どもや青年たちを我が子と見なし、彼らのために生涯を捧げることを決意する。とありました。そんな彼らに希望を与える氏の活動に頭が下がります。（重昭）

お朝事参り

「お朝事参り」とは、広辞苑によると「浄土真宗では、信徒が朝早くお寺にお参りすること」と書かれています。我が家のお内仏では、なかなか続けることが出来ません。それで昨年の秋ぐらいから、お寺のお朝事にお参りしようと思い立ち、今日までどうやら続いています。

先日の「教区婦人研修大会」で、伊藤元先生が、真宗門徒の生活習慣について、「習慣は自然のごとし」という孔子の言葉を引いて、習慣は大切なもので、生活を動かし人を変えていく力があると言われました。また、「習慣は第二の天性」というキケロの言葉を引かれて、一つのことをずっと続けていくと、自分の性質にまでなるとお話下さいました。

一日の始まりをお寺から

毎日続けて本堂に座し、まずは如来さまを仰ぎ、手を合わせ、正信偈・ご和讃をあげて念佛申すことが、私自身の身について、ついには私自身と一つになってくるという深い意味のあることなのでした。

皆さんも、二度とない今日一日の始まりに、お寺に来てみませんか。日々続けていくと、行かずにはおれない気持ちになってくるのは、なぜでしょうか。仏様が背中を押してくれるのでしょうか。（香田 紀子）